

蘆刈 大和物語 百四十八段

1 傍線は読解に役立つ重要語・重要文法事項。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。

津の国の難波のわたりに家居して住む人ありけり。あひ知りて年頃ありける、女も男もいと下種にはあらざりけれど、年頃わたらひなども、悪くなりて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所へ行きつつ、ただ二人住みわたるほどに、さすがに下種にしあらねば、人に雇はれ、使はれもせず、いとわびしかりけるままに、思ひわびて、二人言ひけるやう、「なほ、いとかくわびしうては、えあらじ」、男は、「かくはかなくてのみいますかめるを見捨てては、いづちもいづちもえ行くまじ」、女は、「男を捨てては、いづち行かむ」とのみ言ひわたりけるを、男「おのれは、とてもかくても経なん。女のかく若きほどに、かくてなんある。いといとほし。京に上りて宮仕へもし、よろしきやうにもならば、われをも訪へ。おのれも人のごともならば、必ず尋ねとぶらはん」など、泣く泣く言ひ契りて、便りの人に付きて、女は京に來にけり。

さしはへいづこともなくて來たれば、この付きて來し人のもとに居て、いとあはれと思ひやりけり。前に萩、薄いと多き所になんありける。風など吹きたるに、かの津の国を思ひやりて、「いかであらん」など悲しくて詠みける。

ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の萩ぞこたふる<sup>3</sup>

2 そよ||そうよ、そよその掛詞。ましの意味は(ドウ)シヨウカシラ

となん、一人ごちける。

さて、とかく女さすらへて、ある人の、やむことなき所に宮たてたり。さて、宮仕ひするほどに、装束清げに、むつかしきこともなくてありければ、いと清らかに、顔、容貌もなりにけり。かかれども、かの津の国を片時も忘れず、いとあはれと思ひやりけり。便り、人に文付けてやりたりければ、「さいふ人も聞こえず」など、いとはかなく言ひつつ來にけり。わがむつまじう知れる人もなかりければ、心ともえやらず、いとおぼつかなく「いかがあらん」とのみ思ひやりけり。

かかるほどに、この宮仕へする所の北の方亡せ給ひて、これかれある

人を召し使ひ給ひなどする中に、この人を思ひ給ひけるほどに、思ひつきて妻めになりけり。<sup>3</sup> 思ふこともなくて、めでたげにて居たるに、ただ人知れず思ふこと一つなむありける。「いかにしてあらん。悪しうてやあらん、良うてやあらん。わがありどころもえ知らざらん。さて、人を遣りて、尋ねさせむとすれど、わが男聞きて、うたてあるさまにもこそあれ」と念じつつありわたるに、なほいとあはれに思ゆれば、男に言ひけるやう、「津の国といふ所の、いとをかしげなるに、いかで難波に祓へしにてふまからん」と言ひければ、「いと良きことなり。我もろともに」と言ひければ、「そこには、何ものし給はんぞ。おのれ一人まからむ」と言ひつつ出で立ちて往にけり。

難波に祓へして帰りなどする時に、「このわたりに、見るべきことなるある」とて、「いま少し、とやれかくやれ」と言ひて、この車を遣らせつつ、家のありしわたりを見るに、屋もなし。人もなし。「何方いづつかたへ往にけむ」と悲しう思ひけり。かかる心ばへにて、ふりはへ来けれども、われむつまじき従者ずさもなし。かかれば、尋ねさすべき方もなし。いとあはれなれば、車を立てて眺むるに、供の人は、「日も暮れぬべし」とて「御車うながしてん」と言ふに、「しばし」と言ふほどに、蘆担あしになひたる男の、かたゐのやうなる姿なる、この車の前より行きけり。これが顔を見るに、その人といふべくもあらず。いみじきさまなれど、わが男に似たりけり。これを見て、よく見まほしきに、「この蘆持ちたる男呼ばせよ。かの蘆買はん」と言はせけり。さりければ、「用なき物、買ひ給ふ」とは思ひけれども、主うしのたまふことなれば、呼びて買はず。「車のもと近く担ひ寄せさせよ。見ん」など言ひて、この男の顔をよく見るに、それなりけり。「いとあはれに、かかる物商ひて世経る人、いかならん」と言ひて泣きければ、供の人は、なほおほかたの世をあはれがるとなん思ひける。

かくて、「この蘆の男に物など食はせよ。物などいと多く蘆の値あたいに取らせよ」と言ひければ、「すずろなる者に、何かは物多くたまはん」など在于る人々も言ひければ、強ひても言ひにくくて、「いかで物を取らせむ」と

<sup>3</sup> 「思ひ給」の主語は主人、「思ひつきて」の主語は主人公の女。「思ひつく」は思いが着く、心を寄せる

思ふ間に、下簾したすだれのはぎまの開きたるより、この男おとこまもれば、わが妻めに似たり。あやしきに目をとどめて見るに、「顔も声もそれなりけり」と思ふに、思ひ合はせて、わがさまのいといらなくなりたるを思ひけるに、いとはしたなくて、蘆あしもうち捨てて、走り逃げにけり。「しばし」と言はせけれど、人の家に逃げ入りて、竈かまの後方しりへにかがまりてをりける。

この車より、「なほこの男、尋ねて率ひて来こ」と言ひければ、供の人、手を分かちて、求め騒ぎけり。人、「そこなる家になん侍りける」と言へば、この男に、「かく仰せごとありて召すなり。何の、うち引かせ給ふべきにもあらず。物をこそはたまはせんとすれ、幼き者などのやうなる」と言ふ時に、硯すずりを乞ひて文を書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住み憂き

と書きて、封じて、「これを御車に奉れ」と言ひければ、「あやし」と思ひて、持て来てたてまつる。開けて見るに、悲しきことに似ず。よよとぞ泣きける。さて、返しはかがしたりけん、知らず。車に着たりける衣脱ぎて、包みて、文など書き具してやりける。さてなん帰りける。のちにはいかがなりにけん、知らず。

あしからじとてこそ人の別れけめなにか難波の浦も住み憂き